コロナウイルス文献情報とコメント(拡散自由)

2023年10月27日

JAMA Pediatr：

妊娠中の新型コロナワクチン接種に取り組むことは、妊婦に対する包括的ワクチン接種の枠組みの推進につながる

【松崎雑感】

妊娠中の女性と胎児、新生児は、免疫弱者です。次々に出現する新たな感染症を防ぐために、ワクチン接種がとても大きな役割を果たします。コロナパンデミックをきっかけとして、妊娠中の女性に対するワクチン接種の安全性と有効性を検証する作業が進んでいるとともに、一層の充実が必要とされています。「予防できる病気を予防しましょう」と言う事です。スローガンだけでなく、証拠に基づいたワクチン推奨が何よりも必要です。

松崎道幸　道北勤医協ながやま医院　matsuzaki-m@dohoku-kinikyo.or.jp

妊娠中の新型コロナワクチン接種に取り組むことは、妊婦に対する包括的ワクチン接種の枠組みの推進につながる

Healy CM, Riley LE. Safety and Benefits of COVID-19 Vaccination in Pregnancy-Implications for the Maternal Vaccination Platform [published online ahead of print, 2023 Oct 23]. *JAMA Pediatr*. 2023;10.1001/jamapediatrics.2023.4496. doi:10.1001/jamapediatrics.2023.4496

新型コロナワクチンに対するワクチンの効果は確立されている。高齢者、基礎疾患を持つ人々などの感染弱者への効果と安全性も確認されている。

妊娠中に感染症に罹患すると、一般人口よりもはるかに高い死亡率と重症化率がもたらされることは、歴史的に証明されている。

1918年のスペイン風邪では、感染妊婦の50%が死亡した。

医学が進歩した2009年のH1N1インフルエンザ流行時でも、感染妊婦のICU治療リスクは一般人口の7倍となり、人口のわずか1%の妊婦が、インフルエンザ死の５%を占めていた。

新型コロナでも、感染妊婦と新生児の重症化と死亡リスクが一般人口よりも高いことが、観察研究とコホート調査で報告されている。

一方、母体へのワクチン接種が免疫を強め、胎児、新生児を感染から守ることが証明されている。しかし、残念なことに妊婦の接種率は低い。

しかしJAMA Pediatrに発表されたヨルゲンセン氏の論文は…

この論説は、10月25日のコロナ情報で紹介した妊娠女性へのコロナワクチン接種が、胎児、新生児の健康状態改善をもたらしていたという論文を対象としたものです。
次スライドに、10月25日紹介論文の要旨を示します。

【10月25日のコロナ情報の再掲】

妊娠中の新型コロナワクチン接種と出生直後の乳児の健康状態との関連

Jorgensen SCJ, Drover SSM, Fell DB, et al. Newborn and Early Infant Outcomes Following Maternal COVID-19 Vaccination During Pregnancy [published online ahead of print, 2023 Oct 23]. *JAMA Pediatr*. 2023;10.

背景：われわれは以前、妊娠中の新型コロナワクチン接種が、新生児と乳児の新型コロナ感染と入院を減らすことを報告した。今回、妊娠中のmRNAワクチン接種が新生児と乳児の健康状態にもたらす影響を検討した。

目的：妊娠中のmRNAワクチン接種が新生児と乳児に有害影響をもたらすかどうかの検討。

結果：14万2千6名（男児51%。平均在胎週数38.7週）のうち母体ワクチン接種あり85670名（60%）。母体ワクチン接種ありで有意に重症新生児障害が少なく（7.3%対8.3%、調整リスク比0.86）、新生児死亡が少なく（0.09% 対0.16%; 調整リスク比 0.47）、NICU入床が少なかった（11.4% 対 13.1%; 調整リスク比 0.86）。

母体のワクチン接種と新生児再入院リスクに有意差は見られなかった（5.5%対 5.1%、調整オッズ比1.03）。6か月以内の入院率にも差は見られなかった（8.4% 対 8.1%;調整オッズ比1.01）。

考案：本コホートでは、母体のmRNAワクチン接種が重症新生児障害・新生児死亡・NICU治療のリスク低下と有意に関連していた。また、母体ワクチン接種による生後6か月以内の入院リスク増加は見られなかった。

…このヨルゲンセンの研究調査の確固たる内容は、新型コロナだけでなく、妊婦へのワクチン接種全般がもたらすベネフィットの重要性を示している。

新型コロナワクチンが母体だけでなく胎児と新生児に対しても有効かつ安全であることが示されたことで、重篤な感染症に対するワクチン接種を推進する重要な根拠が得られたと考える。

また、母体へのワクチン接種が、先天性欠損症、自然流産、早産などの合併症リスクを高めなかった。

妊婦に対するインフルエンザワクチン接種は数十年間推奨されてきたが、接種率は50％程度にとどまっている。

安全性への懸念、妊娠中のインフルエンザ感染が重篤な結果をもたらすという情報が行き渡っていない、母体へのワクチン接種が、生後6か月まで新生児を感染から守るという知識が行き渡っていないことなどが原因と考えられる。

母体が破傷風、ジフテリア、百日咳を受けると、これらの感染症で死亡するおそれの高い生後2か月までの新生児にしっかり免疫が作られることも伝える必要がある。

妊婦にRSVワクチンを投与すると、新生児に致死的RSV感染症を防ぐ抗体が移行することも、このワクチンの最初の臨床トライアルで明らかにされている。

FDAは妊娠中のRSVワクチン投与を認可しているが、CDCは推奨を保留中である。もし推奨が得られたなら、新生児のRSV感染防止上妊婦へのこのワクチン投与が効果的かつ安全にできるようになるだろう。

妊婦と新生児を守るためにどのようにワクチン接種をひろげるべきか？

効果、安全性、免疫力持続について長期間の調査成績を公開することが大事だろう。

WHO、CDC、米国産婦人科学会、米国小児科学会など権威ある機関との協力提携も重要である。

もっとも効果的なのは、権威あるヘルスケア専門家機関が、すべての人々に強力に推奨を行うことである。

妊娠中のワクチン接種を促進するためには、婦人科受診時にワンストップで接種が受けられるようにすることが重要である。

妊娠中のワクチン接種の仕組み（プラットフォーム）を整備することは、妊婦と胎児、新生児の命を守るうえで極めて重要である。

インフルエンザ、百日咳、新型コロナ、RSV、近い将来実用化されるグループB連鎖球菌感染症から妊婦と新生児を守るワクチン接種が進むらラバ、公衆の保健改善に大きく寄与するだろう。

しかし、人々の信頼を獲得するためには、効果と安全性をしっかり確認することがなによりも重要である。

今回紹介したヨルゲンセン氏の研究は、妊娠中の新型コロナワクチンの効果と安全性を信頼性を持って明らかにした。

新興感染症の出現が懸念されている現在、この取り組みは、われわれに大きなヒントを与えるだろう。